第２章　低年齢児保育とは

巷野 悟郎 委員

１．はじめに（日本における子育ての変遷）

終戦後の昭和24年は外地からの引き上げ者が多く、いわゆる復員妊娠という状況で、第一次ベビーブームの時代（出生数：270万人）であった。その後、この頃の子どもが成人し、昭和48年には第二次ベビーブーム（出生数：209万人）が起こった。この出生数が次の第三次ベビーブームを起こすかと期待されたが、出生数は漸減したまま40年を経過して今日に至っている。

昔は、生まれた子どもはそのまま親が育てるのが普通で、300年前の江戸時代の育児書でも、ほとんどが家庭での子育てである。

その後明治・大正と文明開化の時代になると女性の労働も始まり、貧富の差が家庭での子育てを困難にしたから、時に捨て子などの状況を社会が救済する時代となって、第三者による子育てが行われるようになった。

時代が太平洋戦争後に移ると、敗戦国日本は食物不足や生活環境の変化などにより、子育ての困難な家庭が増加した。このため、昭和23年に児童福祉法が制定され、子育て支援のために児童福祉施設が開設された。それが現在の保育所であり、労働基準法で定められている産休明け以降の乳幼児が対象である。また、24時間預かる施設としては乳児院があり、主に乳児が対象である。

保育所・乳児院には、救貧を目的に預けられる乳幼児が多かった。しかし、その後の時代の移り変わりとともに、女性の社会進出が盛んになった。これに伴い保育所保育の対象児も低年齢化が進み、昭和50年代には低年齢児を含む保育は普通となり、今日に至っている。

２．本研究における低年齢児について

本研究は、保育所保育が対象とする乳幼児のうち、生まれて間もない「低年齢児」を対象としている。低年齢児には、特に定義はないが、出生から入学前までの発育段階を整理すると、０・１・２歳と３・４・５歳とで、明らかに差が認められる。本稿の各所で触れているように、乳幼児期前半の０・１・２歳児は、胎児期から続く基本的な成長と発達のときで、この間にほぼ自立するときである。しかし本人は成人してから、その頃のことが記憶として残るまでに至っていないのである。

これに続く３歳になると、自我の発達とともに時間・空間の世界は拡がり、長期間の記憶力は、成人になってから、この頃のことを思い出すことができるまでに成長・発達する。それはこの頃から教育を受けることができるまで発育していることでもある。

このような理由から、本研究における「低年齢児」を０・１・２歳児とした。

３．胎児から幼児までの発育

保育所が対象とする小児は、からだが「成長」し、からだの働きや精神知能の基本的な「発達」のときで、両者を合わせて「発育」と表現している。

その発育段階を生後の年月齢で数えると、生まれる前の母の胎内にいるときが「胎児」で、生後４週間が「新生児」、１歳未満が「乳児」、１歳から６歳未満の小学校入学前までを「幼児」と称している。

保育所が対象とする乳幼児は、生後８週間を過ぎてから入学前までの乳幼児で、一生のなかで最も発育の旺盛なとき。このおよそ６年間で新生児は、心身が小学校の義務教育を受けられるまでに発育する。

保育所が対象とする乳幼児期は、人の一生で最も大切な時期。しかも毎日絶え間ない発育であり、すべてにおいて個人差があるから、保育に当たっては一人ひとりの現在の発育状況を理解していかなければならない。

４．低年齢児の特徴

出生後間もない産休明け乳児から入学前の幼児までの発育を追うと、前半と後半とで明らかに大きな差が認められる。ここでは、乳幼児のうち前半の低年齢児群（０・１・２歳）の特徴を挙げる。

（１）胎児から新生児へ

乳児は、生まれる前は胎児であった。その頃はすべてが母体依存で自ら呼吸していない。生まれると同時に産声をあげて呼吸が始まり、母と結ばれていた臍帯が切られると、一人の新生児となる。しかしその段階では空腹になっても自分で行動できないから泣くと、母は抱いて乳を飲ませる。寒くても泣くだけだから、母はそれを感じとって衣服を着せたりして、暖かくしてあげる。新生児・乳児は24時間すべてに手がかかる存在である。

（２）心臓

生まれた途端の産声とともに、自分の肺を使って呼吸が始まる。胎児のときは肺を使ったことはない。心臓だけが動いて血液を循環させていたのである。そこで生まれてしばらくの間に心臓内の穴や、心臓と肺の間の血管の一部が閉じたりして、肺での呼吸が軌道にのる。このようなことが生まれて少しの間に起こっているので、生まれてしばらくはすべてが「試運転中」と表現されよう。呼吸数や脈拍を数えるとき、リズムが乱れていることがある。このときの穴

の閉じ方が遅いときは、心臓音に特徴があるので、その後経過を見ることがある。入園時に親や主治医からの連絡があるときは、日常の注意を聞いておく。

（3）呼吸（SIDSの特徴から考える）

呼吸運動は生まれた時からなので、始めはとくに不規則。からだが動いたとき早くなったり、静かになったりする。毎日の授乳やおむつ替えなどで、抱いたりしているうちに全身に力が入るようになり、３ヶ月頃になると、先ず頭を支える首がしっかりしてくる。これが「首のすわり」で、やがて母子健康手帳にあるように、上から下へと運動機能が発達していく。このようなからだの動きは、始まったばかりの呼吸運動も強くしていく。この頃の乳児は、こちらから何かと手を貸してあげなければ、自分から動くことは少ない。折りを見てできるだけ抱いたり、からだの動きに手を貸すようにする。

近年、生後４～５カ月頃までのSIDS（Sudden Infant Death Syndrome、「乳幼児突然死症候群」）による死亡が注目されている。突然の呼吸停止である。調べてみても原因がわからない。しかし死亡前の状態を見ると、次のような特徴がある。

・仰向け寝よりうつぶせ寝が多い
・母乳よりミルクによる栄養児が多い
・着せ過ぎが多い

以上の状況を呼吸のしやすさから見ると、SIDS児はいずれも呼吸が楽な状態であった。自然界の哺乳動物がうつぶせ寝か横向きで寝るのと同様、仰向け寝より呼吸しやすい。また哺乳の際、母の乳首から直接飲むより、哺乳びんの乳首の方が力を入れなくても呼吸が楽で飲みやすい。そして生まれてしばらくは、母の胎内にいた時のように暖かくくるまれて安定している。

上記の三つの特徴は呼吸しやすい状態なので、生まれて始めての呼吸には良くても、呼吸力を強くするのには効果が少ないと考えられる。乳児は空腹でも寒くても何かとよく泣く。この「泣き」こそ始めての呼吸力を強くしていくであろう。昔の人は経験的に、「泣く子は育つ」と表現している。

以上から現在は首がしっかりして、自分で寝返りができるようになるまでは「うつぶせ寝」にしないように勧められている。（実際に「仰向け寝」が一般的になってから、突然死は減少している。）

また、ライオンなど哺乳動物は、生まれたばかりの仔を親が軽く噛んだり、じゃれついて刺

激すると言う。これは親の本能的な動作のようで、その結果、生まれたばかりの子どもの呼吸力を強くしたり、便通をよくしているのではないかと言われている。動物の本能的な知恵で、人のSIDS予防の参考となろう。

（4）哺乳について

哺乳動物の子どもは、空腹になると自分から母の乳を求めて動き、乳首を吸って飲む。人の子どもは、自分で行動することはできないから、空腹になると泣くだけ。そこで母（保育士）は、「この前は何時頃飲ませたか。」、「そのときよく飲んだかどうか。」などと考えて、今の泣きが空腹と判断したら飲ませる。これが「自律授乳」で自然の授乳法。これをくり返しているうちに、「今の泣きは空腹？」と判断して飲ませることができるようになる。

昔は時間を決めて飲ませる「時間制授乳」があった。この方が飲ませる側は気を使わないで好都合であったが、空腹を満足させるということからは程遠い授乳法である。このため、「乳児の心の発達という点から見て問題である。」ことから、今は飲みたいときに飲ませて満足させる「自律授乳」が一般的。アメリカでは、乳児が自分で調節して飲むということから、self demand feeding（自己調節栄養法）と呼んだことがある。

家庭での母乳栄養ではこの「自律授乳」が一般的で、24時間欲しいときに飲ませていると、生後２ヶ月頃までは昼夜何回でも飲んでいるが、いつの間にかおとな達の昼夜の生活リズムが、乳児自身の昼間の目覚めと空腹と哺乳、そして夜間の眠りのリズムを作っていくようになる。

大正・昭和の時代は、乳児が泣いたときは泣きやませるための授乳が一般的であったようである。乳首を吸わせることの方が目的で、栄養というより母と子の生活の一部であったのかもしれない。

（5）排泄（尿と便）

動物によっては、排泄は慎重である。排泄物の臭いによって存在が知られるので、敵に襲われてしまう。犬猫などの哺乳動物はおよそ一定のところを選んでの排泄であるが、人の子が一人で排泄できるようになるのは、生後３～４年たってから。これにはかなりの個人差があるが、少なくともその傾向が見え始めるのは、早くても「二足歩行」「ひとり歩き」が始まってからであろう。それまでは陰部を清潔にしてあげることと、「排泄しそう。」「排泄した。」と思われたら、声かけをして見てあげたい。

始めは排尿便の量が少なく、おむつについた排泄物の肌への接触は少ないので、それほど問題ない。生後半年を過ぎる頃になると量も多くなる上、排尿便のときの様子の変化もあるので、

そのときの声かけや手をかけることは、尿意や便意を意識させるようになる。始めは気持ちがうまく合わなくても、繰り返しているうちに子の様子をうまくとらえて、おむつの取り換えに成功するようになる。このようなことで、成功する時期にはかなりの個人差があり、はいはいの始まる生後７～８ヶ月頃からその徴候がある。自然界の動物は、寝場所から自分で歩いて別の場所で排泄するから、人も二足歩行の発達と関係して排泄の自立が始まる。

「したそうな様子」「した様子」が見られたら、声かけをしながらおむつを見たり、相手をしてあげよう。やがて言葉が出るようになるにつれて、自分のしたい気持ちを訴えられるようになる。

人は哺乳動物なので、いつかは排泄が自立する。「排泄のしつけ」という言葉で何かと手をかけすぎることがあるが、様子によって手を貸しているうちに、自立するように発達していく。それはほかの基本的な発達「二足歩行」や「言葉の発達」と同じである。

（6）体重・身長

母体内での胎児の成育は大きい。およそ280日間の妊娠期間で３kgにまでなって生まれてくる。生まれてからもしばらくは体重増加は大きく、生後３カ月頃には、出生時の２倍になる。従ってこの間の体重割の哺乳量は生後で最も多く、飲ませれば吐くまで飲んでしまう。

３、４ヶ月頃になると飲み方も落ち着いて、体重・身長の増加もやや緩やかになり、食事は乳から離乳食、やがては幼児食へと移って、毎日が新しい食体験という月齢となる。

これらが順調に進行しているかを知るためには、体重・身長の定期的測定が必要。これを図に示して食事の進み具合を確認し、栄養素の過不足に注意する。これらは「母子健康手帳」に記録して、家庭での食事の参考とするように説明する。

（7）運動機能の発達

乳児は自分で何をすることもできないから、何かにつけて泣く。そのとき親（保育士）は、子を抱いて乳を飲ませたり、おむつを替える。そのときいろいろな姿勢をとるから、動きにも連動して、からだの各部の機能が発達していく。そして最後は立って歩くまでになる。そこにいくまでの発達には、次の原則・順序がある。

原　則：運動機能は脳の中枢に近いところから末端に向かって、順序を経て発達していく。

１）始めは首に力がついて、まず「首がすわる」

↓

２）首がしっかりするから、相手をしているうちに、からだに力がついて次には「おすわり」

ができるようになる

↓

3）次いで全身に力がついて、二本足で立てるようになる

↓

4）やがて「ひとり立ち」で足を動かして、一歩、２歩と「一人歩き」するようになる

「首のすわり」の後の「寝返り」、「おすわり」から「つかまり立ち」の間の「はいはい」などの動きは、いつかはできるようになるが、その時期に略してしまうことがある。理由は、その頃の厚着などによる不自由な動きが関係することがある。薄着は動きを自由にするので発達は早い。このため、寒冷地と暑い地方とでは、最後の「ひとり歩き」の時期に差がある。

（8）二足歩行

全身が発達した最後に、「二足歩行」「ひとり歩き」が始まる。始めは一歩歩いては転び、二歩歩いては転ぶをくり返しながら、バランスをとって歩けるようになる。そのとき側にいる人は、いつもあたたかい目で見ていることがわかる。そして子どもが一歩歩いて転んだときでも、決して不快な顔をしない。「歩けなかった」と叱らない。「一歩しか歩けなかった」のに、前向きに「歩いた」と手を叩いて喜ぶ。これが力となって、また子どもは笑顔で立ちあがって歩いてみる。このようなプラス指向が、０歳・１歳・２歳の子どものすべての発達の力となる。

（9）言葉

胎児はある月齢になると、母の喋る声を子宮内で聞きながら育っている。生まれてからの乳児健診のとき、乳児は始めての人の声と、聞き慣れていた母の声を聞き分けていることが分かる。母の声で泣きが止んでしまったりする。乳児は母の声（音）を早くから敏感に感じとっていて、母と子の気持ちが結ばれていることになる。自然界の哺乳動物では、身を守るための発達であろう。

このようなことから、保育者は、世話をしているときは何かとやさしい言葉かけをしてあげたい。子どもは、聞き慣れていくうちに安心して飲んだり眠るようになる。それはまた、発育とともに少しずつ言葉の違いを感じとれるようになることであり、それが何かと結びついて、言葉が分かるようになる。

しかし、この「言葉かけ」は教えるためではない。何かと話しかけながら子どもの声に答えながら接しているうちに、いつの間にか心が通じ合っていくのである。やがて子どもは、おとなの真似をしながら楽しく発語していくから、日本語は日本語なりの発音で言葉を覚えていく。世界には沢山の言語があるが、中でも日本語にはかなり特徴があるという。それでも子どもは

いつの間にか覚えて、３歳頃には「あした」「きのう」も分かるほどになり、生活がひろがっていく。

(10) 不慮の事故・傷害から守って「子育ち」

生まれて日が経つにつれて、手足やからだを動かすようになり、「お座り」で視野が拡がり、「はいはい」で行動範囲が拡がり、「ひとり歩き」で行動が自立する。並行して、手指の動きは触れるものを持ったり、持ったもので遊ぶようになる。ときに持ったものを口に入れたり、それであちこち叩いたりする。運動機能の発達とともに、転倒や転落・打撲・外傷・誤飲・熱傷などの事故の発生が多くなる。

０・１・２歳児は生涯のなかで、最も基本的な成長・発達が進行する。成人のように時間・空間の感覚は未発達である。そのときどきの近くの状況を考えない自分中心の行動だからこそ、からだのすべては順序を経て発達していく。しかし、同時に事故や傷害の危険と隣り合わせの状態である。けがが行動を軌道修正しながら発達させていくこともあろうが、それには限界もあり、程度によっては発達を中止させてしまったり、命を落としてしまうことさえある。

そこで一般には、この年齢の乳幼児の発達を促すために、手をかける行為を「子育て」「育児」「保育」などと表現する。しかし、子どもの発達の原点は、子ども自身の行為による傷害や事故から守ってあげての自由遊びが先で、これが子どもの発達を促すことになる。この年齢の子どもに対しては「事故予防」が先で、その結果の本人の「子育ち」と考えたい。日本の「育児」は英語ではchild careと表現されていることからも理解される。